

## ガイド登山・ツアー登山の安心を考える

昨夏の北海道トムラウシでの、低対温症で8人が死亡するという遭難事故は、記憶に新しい。今冬もガイド登山での遭難がマスコミを賑わせた。ガイド登山・ツアー登山での事故が増えている。なぜか？ 第一に挙げられるのは、中高年登山者のさらなる高齢化であり、高齢化による体力の低下であろう。体力不足は、ガイドの経験やツアー登山のシステムでカバーすることはできない。

鹿屋体育大学で運動生理学を研究している山本正嘉教授によると、人は20歳の時の体力を100とすると、1歳加齢する毎に体力は1%減少するという。トムラウシでは参加者15人中、50歳代は一人、他のメンバーは60歳代であった。60歳では、20歳の時の体力の60%しかないのである。もしこのパーティーが40歳代、50歳代での15人であったら、かなり違った結果になったのではないかと想像される。

話が飛ぶ。谷川岳は700人以上が遭難死亡した魔の山として知られている。危険な岩場にチャレンジしたのだから事故があつて当然という考え方がある。その指摘は間違っていないと思う。危険に魅せられての遭難、谷川岳が魔の山と呼ばれた理由であろう。

しかし、危険だけが遭難の原因ではないと、ぼくは思っている。「夜行日帰り」という当時の山行スタイルにも原因があつたのではないか。体力旺盛な若者といえ、寝不足で体調不良、バランスが悪いのに危険な岩場に立ち向かうのだから、バランスを崩して墜落したり、寝不足故の判断ミスがあつたりしたことは想像に難くない。

「山を知り己を知らば、百山するも危うからず」とは持論だが、寝不足による体調不良を自認しないでの登山の強行が、遭難の引き金になつたのではあるまいか。寝不足で体調不良だったのだから、登山を中止すれば遭難は避けられたはずである。

トムラウシの遭難も、下山の強行が原因である。ヒサゴ沼避難小屋で停滞していれば、あんな事故は起こらなかつたはずだ。なぜ下山を強行したのか、ガイドの未熟が指摘されるが、看過できない問題が一つある。それは、「経済的な理由」だ。

ヒサゴ沼避難小屋で停滞すれば、予定が一日伸びる。宿泊費も増えるし、帰りの飛行機代も必要になってくる。増加分は誰が負担するのか。そのことが事前にクリアになっていなかったところに、判断ミスを招く要因があつたとぼくは考える。

ガイド登山・ツアー登山に安心して参加して貰うには、中高年登山者のさらなる高齢化を踏まえたプランニングが必要だ。同時に、金銭の授受があるのだから、その金額でできる範囲(契約事項)を明快にしておくこと、も必要。契約事項を明快にするということは、非常に難しい問題なので、まずはプランニングで安心をアピールしたい。「ぼくのふるさと八百名山」は、ここにも出番がある。